

ろが躁うつ病の発症を、素因と身体的誘因の相互作用という面から論じられることは少なく、もっぱら身体因の有無から内因性—身体因性と二分される傾向にある。老年期躁病では、しばしば身体的誘因や脳器質障害の合併がみられるものの、若年期の躁病と病像自体の差異は乏しい。今後、老年期躁病の発症過程については、素因と身体因との相互作用という面からの検討も必要と思われる。

3) うつ病の入院期間に関連する要因について

田中 敏恒・鈴木 健司	
川島 義章・本間 望	
上原 徹・中沢 秀栄	
山下 正廣・吉田 浩樹	
仲丸 恵・高橋 誠	
北村 秀明・永井 雅昭	
細木 俊宏・渡辺 亮	
福島 昇・鈴木 邦人	
前田 雅也・齋藤 功	(新潟大学精神医学)
鈴木由紀子・飯田 眞	(教室)
幸村 尚史	(田 宮 病 院)
長谷川まこと・坂井 昭夫	(新 津 信 愛 病 院)
松田ひろし	(柏 崎 厚 生 病 院)

【はじめに】うつ病患者の転帰については、欧米では精力的に研究されているが、いまだ一定の知見は得られておらず追試が必要な段階である。現在我々の施設では、近年の操作的診断基準や症状評価尺度を用い、うつ病患者の予後について前方視的に調査している。今回は対象を入院患者に限定し、入院期間と関連する要因とその影響度について検討してみた。

【対象と方法】対象は1992年10月から1993年8月までの11ヶ月間に、新潟大学医学部附属病院精神科、あるいはその他の関連施設に入院した患者のうち、調査に同意を得られた者である。入院時 DSM-III-R 診断により大うつ病（単一エピソードあるいは反復性）、双極性障害（うつ病性）、特定不能の双極性障害のうちいわゆる双極Ⅱ型で、入院時大うつ病エピソードの認められる者、抗うつ剤により治療された年齢が20歳以上の患者である。明らかな知能障害が認められたり、意識障害が疑われる患者は除外した。以上の基準を満たした者36名を対象に解析した。

入院後3ヶ月以内で退院した患者を「退院群」、3ヶ月を越えて入院している者を「非退院群」とし、「退院群」と「非退院群」の臨床特徴を比較検討し、3ヶ月後の転帰に関連する臨床特徴とそれらが転帰に与える影響度を解析した。

統計学的な処理には、平均値の比較は Student の t

検定、比率の比較にはカイ2乗検定と Fisher の直接確率法、多変量解析として重回帰分析を用いた。

【結果と考察】3ヶ月後の「退院群」と関連する要因は以下の通りであった。有意な関連が得られたのは、入院1ヶ月後の GAF 得点が高いこと、入院時の病相の開始から入院までの期間が短いこと、過去に精神科入院歴の認められないこと、入院1ヶ月後の HRSD 得点が高いことなどであった。また3環系抗うつ剤が投与された症例に限って言えば、投与量が多いことなどが有意に「退院群」と関連していた。

また「退院群」と関連する傾向のある要因としては、配偶者がいること、初発年齢が高いこと、入院時の GAF 得点が高いことなどであった。

以上あげた臨床特徴のうち、3環系抗うつ剤の投与量以外の項目について、これらを独立変数に、3ヶ月以内の退院の有無を従属変数として重回帰分析を施行した。その結果、3ヶ月後の「退院群」に関連する度合いの大きい順に有意差の得られたものをあげると、1ヶ月後の HRSD 得点が高いこと、過去の入院歴のないことなどであった。また「退院群」に関連する傾向のあるものは同様に、配偶者がいること、入院時の GAF 得点が高いことなどであった。

4) 「働く人のメンタルヘルス相談室」の実施状況について

山田 治（東大分院神経科）

神奈川県労働部では、労働安全衛生法の一部改正（1988年）による「心とからだの健康づくり」の主旨を生かし、平成元年度より、メンタルヘルス確保対策事業の一環として、横浜労働センター内に「働く人のメンタルヘルス相談室」を開設している。

実施内容は：毎週2回、午後の半日を相談日とし、専門の医師もしくはカウンセラーが相談に応じている。受付は電話にて毎日行っており、2週間以内を基準に相談予定日が決められている。一件当りの相談時間は約50分であり、一相談日当たり3件まで予約を受け付けている。

実施に当たっては、どんな人にも気軽に訪れて頂ける相談室作りを目指した。その点で有利に働いた点、工夫した点を以下に列挙すると：

- ・横浜駅から徒歩4分という交通至便の地にあること。
- ・総合ビルの一画に当相談室が位置し、日中はさまざまな人たちが出入りしていること。
- ・相談室の室内を、できる限りゆったりとくつろげる

ような場所とするため、内装に留意したこと。

- ・電話での予約受付が原則ではあるが、要望に対しては迅速に対応すべく、臨時の相談日を設けたりして柔軟に取り扱っていること。
- ・行政が実施していることで有利な点、例えば、立場の中立性・費用は無料など、を最大限生かしていること。
- ・医療機関ではなく、あくまでも相談室である点を前面に打出し、病気のイメージを払拭していること。

ここ数年間の実施実績の中で、目立った点をみてみると：

- ・相談対象者における女性の増加。特に40歳代において著しい。
- ・相談対象者を年齢別、男女別にみると、男性では20歳代、女性では40歳代にそれぞれのピークが認められる。
- ・相談内容は、心身不調の訴え、職場での人間関係、配転・転職・出向などが目立つ。
- ・予約の電話は自宅から掛ってくるものが殆んどであり、しかも多くは女性が申し込んでくる。
- ・個人ばかりでなく、企業や職場からの問い合わせもみられる。

なお、当相談室ではこれまでの実績をふまえ、「働く人のメンタルヘルス事例集」を発行したりして、心の健康についての啓発にも努めている。

5) 経過中に軽躁状態を呈した逃避型抑うつ の1例

福島 昇・田中 敏恒 (新潟大学精神医学)
飯田 眞 (教室)

エリートサラリーマンに見られた抑制が主体の逃避的色彩の強い抑うつ状態に対して、広瀬は「逃避型抑うつ」という概念を提唱し、その特徴として次のことを挙げた。物質的にも知的にも恵まれて育ち、葛藤の少ない生活史を送るため他人を押しつけて上に行きたいという欲望が乏しくなるが、一方で努力無しに対面を保ちたいという願望が強く存在する。発病は仕事の变化を契機とし、病像は抑制を主体とし、蒸発などの逃避規制が目立つ。そして病棟内では模範的な患者として振る舞う、などである。今回の症例は38歳男性で生活歴では一流高校を卒業後、一流私立大学に進み卒業後は地元の大手銀行に就職した。現病歴では、1983年春の父親の死、配置転換をきっかけとして抑うつ気分や意欲減退が出現し、そして

同年7月に失踪し11月末に発見された。その後、一時的に気分が高揚し教師を志したが手続きミスから断念し、それ以来、抑うつになった。1984年6月(29歳)再就職先に馴染めずにさらに落ち込むようになり再び失踪し、同年7月秋田にて保護された。N大学精神科を初診し、そのまま入院した。入院時は抑制が強く見られたが、抑うつ症状は徐々に改善し9月25日に退院した。1985年2月(29歳)現在の会社に就職し、その後は特に問題なく過ごしていたが、1992年6月(37歳)会社で部署の移動があり、同年10月頃から気分の高まりを感じ始めた。1993年1月第2子が生まれたが、子供の命名をめぐる争いで夫婦関係が悪化した。その後6月まで気分がさらに高揚し、対人関係のトラブルが頻発した。また多弁、易怒性が見られ、金遣いも荒く、睡眠時間も減少した。そして同年7月頃(38歳)から気分が落ち込み始め、仕事のミスをきっかけに3日間会社を無断欠勤し、O病院心療内科を受診した。この時、躁うつ病の診断にて薬物治療を受けたが1ヶ月で通院を止めてしまった。復職した時には会社は業績不振のため仕事が無い状態で、通勤を辛く感じ始めた。そして12月13日会社に行くといって家を出て、そのまま失踪した。失踪中、何度か自殺を考えたが結局、試みる事はなく12月25日に帰宅した。しかし既に妻子は実家に帰っていた。自分は無駄な人間であると考えてO病院で処方された薬物を大量服用し自殺を図った。同月29日自宅を訪れた母親に発見され1月4日N大学精神科を再受診し即日、入院した。入院時所見では軽い抑うつ気分と不安感がみとめられたが、礼儀正しく問題行動は見られなかった。本症例は「逃避型抑うつ」の概念を満たすものと考えられるが、特徴的と言えるのは、軽躁状態を示す時期が存在したことである。このことは、かつて単極性うつ病と退却性うつ病の中間的な病態として考えられた逃避型抑うつが、うつ病相には逃避機制を有しながら、躁病相を伴ううつ病へと変化する症例が存在することを示していると考えられる。今後、症例を積み重ねて、逃避型抑うつの意味を検討して行きたい。

6) 一卵性双生児の精神分裂病不一致例

齋藤 功・佐藤 新 (新潟大学精神医学)
七里 佳代・飯田 眞 (教室)

発端者が就職後に幻覚妄想状態を呈した一卵性双生児の精神分裂病不一致例について報告した。症例は24歳の男性で、発症したのは兄(A)のほうである。弟(B)